

日本アントロポゾフィー看護協会会報 NO.1

JAPANESE ASSOCIATION FOR ANTHROPOSOPHIC NURSING NEWSLETTER No. 1

SUMMER 2021

「蒼穹」村上典子・画 私家版 植物観察作品集「ツクサ」（小林由香、篠裕子、河野弘未代、村上典子共著）より。ツクサの植物観察から描いた、ツクサの本質（色で描く）です。無断転載禁止。冊子に関するお問合せは村上まで。



Contents

- ◆アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会から一般社団法人 日本アントロポゾフィー看護協会へ...1
- ◆オンライン開催しました！ 国際アントロポゾフィー看護ゼミナール第3期第3モジュール ...5
- ◆多職種のホリスティックな取り組みを学んだ第9回アントロポゾフィー医療研究発表会 ...6
- ◆南阿蘇での実践報告 ...8 ◆編集後記 ...9

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会から 一般社団法人 日本アントロポゾフィー看護協会へ 日本におけるアントロポゾフィー看護の普及をめざして

看護師として心に灯る光と愛に気づき、分かちあう意志を育てる



JAAN 代表理事 久保さえり

2008年に設立され任意団体として活動して来ましたが、今年2月25日に、一般社団法人日本アントロポゾフィー看護協会に移行しました。その一般社団法人日本アントロポゾフィー看護協会の初代代表理事を、私、久保さえりがさせていただくことになりました。法人に移行し既に3ヶ月が経ちましたが、今はまだ、色々な取り決めも含め、新体制として形を整えている段階です。

一昨年に発生しました世界的なCOVID-19の感染拡大は、今なお種々の変異株へと進化しその猛威は衰えていません。ワクチン接種が進み感染拡大が抑えられようとしています、医療への逼迫状況はそれらを担う医療関係者にかなりの負担となっています。このような終息が見えない状況の中、色々な思いを胸に医療の現場で奮闘されている会員のみなさまにエールを送りたいと思います。

第3期国際アントロポゾフィー看護ゼミナールは、昨年第3モジュールを実施する事ができなかったのですが、今年は直前まで、4ヶ所に分散して、講義や実習ができないかと検討を重ねていました。しかし、感染状況は日々悪化し、医療は逼迫した状況下では、そのような開催はできないと判断し、今年はオンラインのみで開催することになりました。受講生とオンラインで繋いで、講義が中心となりましたが、新しい可能性を見出し、実りの多い学びができたと感じています。今回見合わせた実習に関わる単位数は、来年の第4モジュールに持ち越されることになります。

世間一般的にオンラインでの勉強会やセミナーが主流となり、アントロポゾフィーの世界もネット対応が急速に進み、今までスイスのゲーテアムで開かれていた多くの会議、ゼミナールや勉強会も、オンラインで開催されています。世界規模での開催では、夕方から真夜中の参加となり時間的な制約はありますが、現地に出向くことなく、経済的にも労力的にも参加し易いといったメリットがあります。しかし、その反面、人と人との繋がりが、ネット画面を通しての表情、言語や文字で行われることで、その人の温かさを感じることもない近くて遠い関係となってきているように思えます。看護場面に関わらず、人の温かさを感じ、自分自身の温かさを認識できることの大切さを、今まで以上に意識する必要を切に感じています。

日本においてアントロポゾフィー看護は、一般的には十分認識されておらず、人々にそして日本の医療・看護に受け入れられるには、まだまだ遠い道のりだと思います。多くの人々が自粛に疲れ、医療関係者は疲弊しています。このような状況下だからこそ、アントロポゾフィー看護のケアを通して、優しく手を差し伸べる事ができるのではないかと感じています。アントロポゾフィー看護は決して特別なものではありません。看護師として自身の心に灯る光と愛に気づき、それを分かち合おうとする意志が育ちますように、お互いに成長していければと思っています。

新しくなりました一般社団法人日本アントロポゾフィー看護協会に、皆様のご支援、ご協力の程よろしく願いいたします。

★くぼ・さえり★ 臨床看護師・看護教員を経験した後、スコットランドのキャンピル看護師コースを受講し、クリニックで6ヶ月実習。その後イングランの病院/施設で外用療法の経験を積む。アントロポゾフィーに基づく絵画・造形療法士（2009年）、国際アントロポゾフィー看護ゼミナール修了（2015年）、リズミカルアインライビングスペシャリスト（2017年）

日本でもアントロポゾフィー医療・看護を受けることができる未来を

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会代表・JAAN 理事 鶴田史枝

皆様方のご理解とご支援により、一般社団法人日本アントロポゾフィー看護協会として、新たな一歩を踏み出すことができました。それに伴い、代表の職を久保さえりさんに引き継いでいただき、今後は一理事として協会の運営に協力してまいります。心からのお礼と感謝を申し上げます。

大住祐子さんの本や講座を通してアントロポゾフィー看護を知りましたが、「うらやましいけど、別世界のこと」と思っていました。それが、2006年 IPMT に参加し、講師の方々や講義内容に感動し、アントロポゾフィー医療・看護を目指す人々との出会いで大きな喜びを得ました。「もっとアントロポゾフィー看護を学びたい」「日本でもアントロポゾフィー医療・看護を受ける事が出来る未来を作りたい」という一心で、2008年4月8人の仲間とアントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会を立ち上げ、14年間突っ走ってきた気がします。会として第3七年期の今、少し落ち着いて、会にとって本当に大切なことは何かを考えていければと思います。今後ともよろしくお願いいたします。



未来へと受け継ぐために

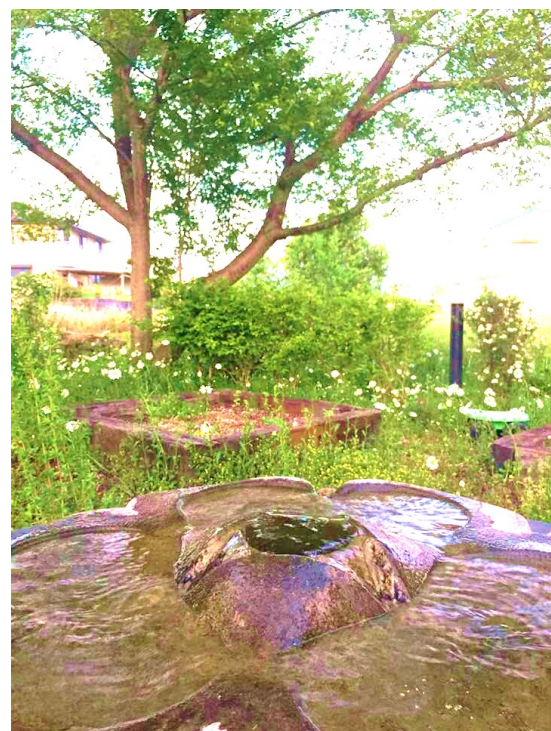
JAAN 理事 揚妻由美子



シュタイナーの人間観に惹かれ、ただ自分の興味のために学んでいた私は、看護師免許を持っていたことでより深く学び、実践の機会を得ることができました。そして気づいたら組織の中にいました。

最近のゼミ受講生は医療現場に深く関わる人も多く、いかに実践するのかは今も大きな課題です。ヨーロッパと似た環境を日本に作るには時間が必要ですが、今でも実践できることはあると思っています。アントロポゾフィーの人間観で患者さんを理解することもその1つです。いわゆる自然療法を科学的な視点で医療と結びつけることも。

会が法人になったことは、この会が未来に続く意志を持っているということです。未来へ引き継ぐための、法人は大事な「器」になれると思っています。これまでの個人の、又組織の实りはまだ多くはありませんが、この法人を通して皆さまと共に深め、更に受け継いで頂きたいと思っています。どうぞ気軽にお声がけ下さい。





皆さまのやりたい思いを形に

JAAN 理事 千田恵子

私は「アントロボゾフィー看護を学ぶ看護職の会」が 2008 年に創設された直後に入会し、2009 年から開催されている「国際アントロボゾフィー看護ゼミナール」に参加し、継続して学びを続け運営にも関わってきました。これまでの任意団体から一般社団法人に移行し、思いを新たに理事として関わることになりました。昨年 1 年間の準備期間を経ているが、私自身は法人についてはまだわからないことも多く、アントロボゾフィー看護は元より法人としての学びを深めながら会員の皆様のお知恵やご協力をお願いしたいと思っています。

会員の皆様のやりたい思いを形にして発信していくプロジェクトチームにより、学びの機会をつくっていけることを願いつつ、自分自身も法人として社会的に認知される言動を心がけていく思いでいます。皆様と共に発展してまいりましょう。



共鳴の中から生まれてくるもの

JAAN 理事 宇野朗子^{さへ}



私のアントロボゾフィー医療・看護との出会いは、2011 年。東日本大震災と東京電力原子力事故が起きて福島から福岡に避難していた時、安達晴巳医師の診察と、千田恵子さん、山添幸恵さんのアインライビングの施術を受けたのが最初でした。それは、満身創痍の身体と魂に、注意深く本質を外さず、やさしく触れ、あたためていただいた体験として心に残り、少し暮らしが落ち着いた頃、誘われて第 3 期看護ゼミナールに参加しました。以来、深遠な人間理解の学びと、癒しをもたらす実践に感動し、希望を感じています。これから、この会に集うたくさんの方とみなさまとずっと交流し、探求を続けたいです。そのような場作りに少しでも貢献できるようにと思います。共鳴の中から何が生まれてくるでしょうか、とてもワクワクします。どうぞよろしくお願いいたします。

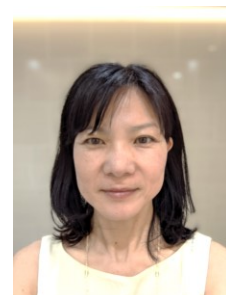


仲間と共に私のできることを

JAAN 事務局 川池由香里

シュタイナーの『礎石の言葉』の最後の段落は、今のコロナ禍の状況で導きを与えてもらえるような励みになる言葉です。『看護職の為の祈り』のなかの“魂の満ちあふれる意志”という部分が一番好きなのですが、音読していると日々の仕事で忘れがちになる自分の大切にしたい部分を思い出します。

わたしの財産は、共に学び続けている仲間とお互い支えあっているような関係を築けたことだと思います。自分たちの在りたい姿が同じ仲間と共に、私のできることで何か会の役にたてたらと思っています。



私たちの歩み

- 2000** 第1回アントロポゾフィー看護のための国際会議（IFAN）開催（於ドルナッハ/スイス）
- 2004** 第1回国際アントロポゾフィー医学ゼミナール（IPMT）開始（於長野）
- 2006** アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会設立準備会発足
- 2008** **アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会（JAAN）設立**
- 2009** ★第1期国際アントロポゾフィー看護ゼミナール開講
- 2010** 全身 リズミカルアインライビング（RE）施術試験→認定施術者21名誕生
- 2011** **東日本大震災**
- 2013** Rolf Heine（IFAN/アントロポゾフィー看護協会国際協議会（ICANA）代表、アントロポゾフィー医学のための国際調整（IKAM）メンバー）来日。看護ゼミ1期修了。アントロポゾフィー看護（AN）スペシャリスト試験実施→ANスペシャリスト5名誕生
- 2014** ★第2期国際アントロポゾフィー看護ゼミナール/AN基礎コース開講。看護ゼミナール修了生対象のアドバンスコース開始。
- 2015** 全身 RE 施術試験→認定施術者19名誕生（累計40名）。JAANは正式にICANAメンバーとなる。
- 2016** REブラッシュアップ講習開始。スペシャリスト（RES）レベル1（現RE基礎コース）試験6名合格（於ドルナッハ/スイス）
- 2017** RESレベル2試験（於ドルナッハ/スイス）→RES5名誕生
- 2018** ★第3期国際アントロポゾフィー看護ゼミナール開講。日本アントロポゾフィー医療の会設立。
- 2019** 全身 RE 認定試験→認定施術者22名誕生（累計62名）。第13回看護職の会総会にて法人化を意志決定。設立準備会発足
- 2020** **COVID-19 パンデミック**
- 看護ゼミ第3期第3モジュール延期
- 2021** 第14回総会・法人設立総会
- 一般社団法人日本アントロポゾフィー看護協会設立**
- 看護ゼミ第三期第3モジュール開催（オンライン）

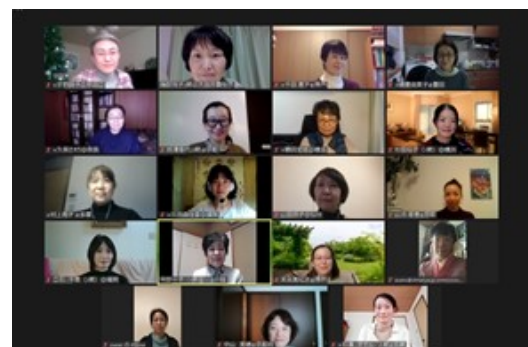


4月29日、アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会が、オープンフォーラム早稲田で設立記念集会を開催しました。5年前、IPMTに参加した8名の看護師が看護養成コース開講の夢を共有し、読書会や17回もの運営会を重ねながら会を発足させました。集会では、設立宣言が読み上げられ、賛助会員の今井重孝さん（青山学院大学教授）とフォーラム・スリーのしまだれいこが祝辞を述べました。その後の懇親会では、それぞれの看護への思いを和気藹々と語りあい、パステル画で表現しました。

同会は看護職の人たちに学びと交流の場を提供しながら、ゆくゆくはゲーテアヌム精神科学自由大学医学部門認定のアントロポゾフィー看護師養成講座開設を目指します。

写真：会場となったオープンフォーラム早稲田で記念撮影。長野から保健師の大住祐子さんも駆けつけました（後列左から2番目）。

Cultural Creatives' Magazine No.72, Jun. 2008 より



オンライン開催しました！

国際アントロポゾフィー看護ゼミナール第3期第3モジュール

どんな状況下でも、できることを共に。

看護ゼミ基礎コース担当 SP 村上典子

5月1日から5月5日にかけて、3巡目の国際アントロポゾフィー看護ゼミナール基礎コースの第3モジュールが、オンラインで開催されました。アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会が、アントロポゾフィー看護協会となって、初めて行う大きな企画でもありました。本来このモジュールは、昨年のゴールデンウィークに開催されていたはずなのですが、世界中を襲ったCOVID-19感染の影響を受け、延期を余儀なくされていました。

事態の鎮静化を望み、1年先延ばしにしたのですが、状況は大きく変わることはなく、今もその渦中にあります。それでも、一縷の望みをかけ、会場を4か所に分けることで、人数を制限した対面授業での開催をと、準備を進めてまいりました。しかし、緊急事態宣言の解除は難しく、最終的には、個人でそれぞれの場所から、スイスにいる主任講師である、サーシャ・グロアーとオンラインで繋がる形を取りました。

アントロポゾフィーでは、対面での実感を伴った交流をなにより大事にするので、個別のオンラインでの講義に対して慎重になりましたが、どんな状況下であっても、できることをしよう、と前向きに物事をとらえ、最新のメディアを駆使することになりました。対面での講義でないため、お引き受けいただけなかった講師も多く、それは残念なことでしたが、ウィルスの猛威の収束が来た時に、あらためて講義いただけたらと思っています。

サーシャは、スイスでの感染が広がる中、訪問看護の日数を増やされ、大変お忙しくされていたので、準備は大変だったと思います。講師を探すことも含め、ご尽力いただきました。浅田さんに至っては、感謝しかありません。

オンラインでできる講義だけ、それも参加者の体に負担をかけないこと、を優先したので、第4モジュールに移行し

た講義もあり、全体では、いつもの1週間のゼミナールの半分くらいのボリュームになりました。

画面で、参加された20名のみなさんの顔を拝見した時、本当に嬉しくて、心が熱くなりました。みなさんに、こんなにもお会いしたかったのだと、あらためて気づきました。

アントロポゾフィー看護を学ぶということは、技術やセオリーを学ぶだけでなく、仲間と共に在り、研鑽し合い、支え合うことです。

ゼミナールは、技術的なトラブルもなく、最後まで護られました。すべてにおいて、これから繋がるよい学びの時間でした。



粘土の体験実習作品

宇宙の広大さと影響しあって生きている

人間という存在の不思議さ

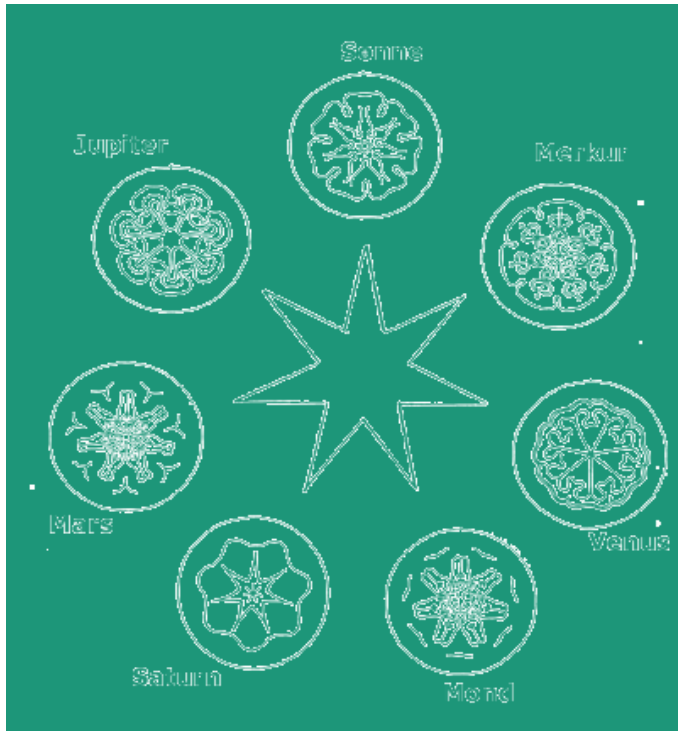
青山輝美

すぐに終息するだろう、そう高をくくっていたCOVID-19。ペリーの黒船のごとく世界に現れてから様々な変化を引き起こしている。それは100年もたつアントロポゾフィーの世界にも変化をもたらした。私は新参者なので良くは知らないがアントロポゾフィーの世界で今まで嫌厭されていたネットを導入しないと、第三モジュールが開催できないという状況であった。法人化した日本アントロポゾフィー看護協会の勇気ある一歩を観たい気持ちと、日々の業務で忘れそうになってしまうアントロポゾフィー看護の世界に触れたくて今回受講を決めた。

オンラインで講座ができるよう内容、時間、充実度を考慮した大幅なカリキュラム変更があった。主軸は7惑星、臓器、金属、魂のタイプと金属、金属製剤の理解。ネッ

ト越して久しぶりに会えた講師のサーシャさん、通訳の豊さん、そして3期メンバーとともに壮大な宇宙を巻き込んだ人間理解の旅を駆け抜けた。

ネット回線の状態によって途中で固まったりするトラブルはあるものの、共有される画面はとても見やすく集中できた。



惑星の封印

「惑星と金属」。この出発点から金属の治療の歴史、植物の背後に働いている惑星の力、私たちの日常と惑星のつながり、そして臓器から体に広がっている小宇宙への理解に講義は進んでいく。マクロからミクロへ。宇宙の広大さと影響があって生きている人間という存在の不思議さを味わうことができたと思う。

症例はバーンアウトや鬱、トラウマなど精神科が多くサーシャさんの説明は患者の症状を体験したかのようにプロセスで語られた。教科書的な症状でなく、患者に何が起きているのかを理解すること。そうでないと臓器、惑星、金属の性質をうまく活用できないのだなと思った。

様々なアプローチを聴くたびになんて可能性が大きく創造的な看護なんだろうとドキドキした。看護学校や日本の現場では触れにくい全人的に人を見ること、アントロポゾフィー看護の授業に出るたびにその面白さと難しさで時に胸を高鳴らせ、そして時に頭を掻きむしるくらい悩まされる。

今回、頭を掻きむしるくらい悶絶させていただいたのが「人間の構成要素に即した観察」だろう。第一モジュールで学んだ三分節、四つの構成要素、そして今回学んだ惑星、金属の視点。これだけでも頭から煙がでそうだが、さらに気質と惑星タイプにも絡めて映画に出てくる樹木希林を観察するというお題がでたのだ。オンラインならではの機能、ブレイクアウトルームでグループに分かれ話し合う。計三回ほどグループワークがあったかと思うがお題にはない質問もサーシャさんから飛び出してくるため気が抜けない。リアルな会場では、ぼやけがちな話し合うタイムリミットが画面の右端に数字で現れるため世間話する余裕はなく、ただ樹木希林の徹底理解という目的のため走り切った。無駄がなく濃い時間だった。他グループの発表を聞いてよくそこまで話し合ったな！と驚かされ、サーシャさんの樹木希林の観察を聴くと背後に経験してきた現場が見えた気がした。体感してきた人の考えと答えだとわかり考えすぎて机上の空論になりそうだった凝固まった自分の頭がほぐれた。

初のオンライン第3モジュールを終えて法人化するときには会の対象が専門職でよかったなと思った。同じ看護職だからこそ看護への熱をもって話し合えた。また間にあった粘土療法で心がほぐれ休まった。オンラインでも十分魂の熱を感じられ、講師からの愛もたくさん頂けた第三モジュールだったと思う。

オンラインという性質上、体験できなかった実習は次回楽しみにしている。また皆さんと再会できるときまで頂いた熱を忘れず日々の看護に尽力していこうと思う。



★あおやま・てるみ★
神奈川県出身 横浜で訪問看護しています。鳥、占星術などの不思議なことが好き。将来、地域循環型の施設をやりたい！現在ケアマネ資格取のため奮闘中。

多職種のホリスティックな取り組みを学んだ

第9回アントロポゾフィー医療研究発表会

2021年3月28日、オンラインにて第9回アントロポゾフィー医療研究発表会が開催されました。当日研究発表をされた浅野美智留さんにレポートしていただきます。

看護は、神の似姿である人（患者さん）と、自分自身が響きあう素敵な仕事だと、個人的な思いがあります。うろ覚えですが、ミハエラさんやアントロポゾフィー医師が、神や宇宙の代表である患者さんに向き合う幸せな仕事だとおっしゃっていました。すると第9回アントロポゾフィー医療研究発表会に参加することも、神に仕えることでしょうか。僭越ながら報告をさせていただくことになりましたので ①自分が発表した経験と、②全発表から得た響きと癒し、について書こうと思います。

1 自分が発表した経験

私は母乳育児支援で開業している助産師です。看護職の会の方からいただいたお誘いをきっかけに、今回は、探求中のケアについて調べなおして発表することにしました。タイトルは「アントロポゾフィーの視点から繰り返す乳房の現象へのセルフケアを考察する」です。乳房の現象には、手当てで物質的に癒されても繰り返す現象があります。組織学的特徴から、代謝系・神経感覚系のどちらでセルフケアが可能か検討しました。断片的だった題材につながりができ、今はアセスメントに活用しています。アントロポゾフィー看護習熟途上の自分であっても、臨床の成果を確実にする道を歩みたくて…一生懸命つなぎ合わせました。翻って授乳中の女性に還元できることを祈るばかりです。

発表時にいただく質問は自分の糧になり、次なる探求、謎解きが始まります。今回いただいた質問をアントロポゾフィーから紐解くために、シュタイナーの著書を一冊何度も読み返しました。次から次へと課題が出てくるけれど、ちょっとだけより良く実践できることも生まれ…。アントロポゾフィーは壮大すぎて、完遂できないまま（当然ながら）私は現世を終わるんだなあと思息…。でも楽しいです。

2 全発表から得た響きと癒し

今回の研究発表会だけでなく IPMT に参加した時も、私が魅了されるのは芸術療法です！ その素晴らしさを上手く表現できないのですが…。「人間の体に存在する宇宙の響きを、バランスよく人間に浸透させるために芸術を使用する」感じを私は受け、芸術療法士に憧れます。発表者がまとめた芸術療法症例集（希望者配布用）を拝読し、その臨床結果に感動しました。アントロポゾフィー看護の九州支部で音楽療法を体験した時、空間を漂う音を感じながら、その音に自分を乗せて自分を漂わせて動きました。その響きを症例集から受け取った気がいたしました。響きあう、という意味では、冒頭に書いたとおり、看護は対象者と「直接」響きあう自らが媒体でもあり、芸術療法とは違う意味で私は看護職が大好きです。

おふたりの医師の発表は、子どもの意志を大切にする離乳、現代医学の認識とは違う脳の機能の研究でした。患者さんや人間に対する真摯な問いや愛情深さを、自分の身にも受け取った気分になりました。

アントロポゾフィー医療研究発表会に参加して発表を聞いていると、いつも自分の魂に響いて、自分が癒されます。

今回も興味深い内容ばかりで、研究集会を開催していただいた主催者に感謝の気持ちで一杯ですし、人間の癒し・癒される力を堪能でき、参加できた喜びを感じました。

浅野美智留



★あさの・みちる★ 国際アントロポゾフィー看護ゼミナール第3期生。子育て応援ステーションぽっぽ（助産院）

開業。聖マリア学院大学勤務。子どもたちは土曜日クラス卒業生。オイリュトミーを1～2回／月、瞑想は毎日楽しんでいる。

南阿蘇での実践報告

井上万寿江

多様性のある持続可能な暮らしを求めて

みなさん、こんにちは。早いもので大阪から南阿蘇に移住して、1年半が過ぎました。自宅の庭にはアナグマやイタチ、狐、猿、狸、猪などさまざまな動物が訪れます。春、厳しい冬を乗り越え、木々が一斉に芽吹き、新緑に変わる阿蘇山、野鳥のさえずり、風が近づく音、地響きがするほど雷が空を駆け巡る様子など、大阪で毎日仕事に追われていた私には今まで味わったことのない感覚に心躍っています。しかしながら、自然を身近に感じるが故、長雨による土砂災害の恐怖、極端な気温の変化など、気候変動による自然のサイクルの変化を肌身を感じる生活を送っています。

なぜ、この地に移住したのか。これまで主に心に傷を負った子どもたちのケアにあたってきました。けれども、物は豊かになっても生活に追われる毎日、貧困や暴力に苦しむ人々が増え、地域とのつながりが希薄になる社会、そして自然破壊が進み、気候変動による災害が増える状況に、社会自体がおかしくなっているのではないかと思うに至りました。そして、これまでの発想を転換し、多様性を尊重し、すべてのものが有機的に結びつき、持続可能な暮らしを行っている共同体に興味を持つようになりました。その後、直感とご縁で、ここ、南阿蘇に移住するに至りました。



ここでは、看護師として、月1回、子どもの通所支援事業所に勤務し、希望があれば、子どもを通わせているお母さんたちやスタッフにリズムカルアインライビングを行なっています。今は、どちらかというと、土に触れながら、植物のことを知りたいという気持ちの方が強く、ぽっこわば耕文舎での農作業のお手伝いや最近始めたハーブ栽培を通して、植物と大地、人間、動物、昆虫、そして、惑星の働きといったつながりを学んでいます。ハーブを育てるのに、種まきカレンダーを眺め、育て方を調べ、天候を気にしながら株をいつ定植するか、畝の高さや肥料の量など決めていきます。実際に植物と関わりながら、これでよしと感じるところで次の作業に移るといったことを行なっています。それでも、強風が吹き、大雨が降れば、大丈夫かなと心配になります。植物との関係性を築きながら、いつか、自分の育てた植物の力を借りて、人を癒せればと思っています。

自然の中で暮らしていると、自然界の中に住まわせてもらっている感覚になります。夜空を見上げると、天の川や北斗七星が見られ、宇宙の星々とともに地球があることに気づかされます。地球にやさしい暮らしを心がけ、ゴミは最小限にし、生ゴミ等は堆肥にして土に戻すようにし、今年からは庭に日本ミツバチのための巣箱を置いてみました。地球を癒すために、バイオダイナミック農法の畑を増やすことは私にとって今後の大きな望みの一つです。

また、ここは、過疎化・高齢化が進む土地であるため、都市部と同様、かつては強く結びついていたコミュニティも弱体化してきています。それでも、都市部に比べると、まだ近所付き合いは残っており、収穫した農作物やいただきものをあげたり、もらったりという

ことは残っています。お金を介さない物の交換や、物を購入するだけでなく物を生み出すというこれまであまり体験したことのない新鮮な感覚を体験しています。今後も、植物を育てながら、コミュニティのつながりを大切に、そして地元の方々がいつまでも元気に、また訪れた人も元気になるような活動を行っていきたくと思っています。また、いつか近いうちにバイオダイナミック農法で育てた植物のオイルやハーブティを皆さまにお届けできればと思っています。

★いのうえ・ますえ★ アジア系アメリカ文学を学んだのち、看護師の道へ進み、主に、児童思春期精神看護に携わる。スコットランドのフィンドホーン財団にて、Ecovillage Design Education コース受講、レイキ、ヒーリングタッチ、フラワーエッセンス、マクロビオティック・ダイエット、マインドフルネスを学び、アントロポゾフィー看護に出会う。国際アントロポゾフィー看護ゼミナール第3期生。正看護師、文学修士、看護学修士。

アントロポゾフィー医療 100 周年記念祭開催のお知らせ

当協会も構成団体となっております、日本アントロポゾフィー医療の会では、アントロポゾフィー医療 100 周年を記念して、この秋、記念祭をオンライン開催いたします。

10 月 30 日、31 日の 2 日間、アントロポゾフィー医療に携わる、医師、看護師、薬剤師、絵画・造形療法士、音楽療法士、オイリュトミー療法士、リズミカルマッサージ療法士が、一堂に会して、「アントロポゾフィー医療とは何か」、「アントロポゾフィー医療の実際」、「アントロポゾフィー薬学について」をテーマにお話します。また、「現代の課題とアントロポゾフィー医療 ～ポストコロナがもたらすもの～」と題して、世の中の分断や AI などの台頭による人間性の喪失など、現代の課題に対してアントロポゾフィー医療は何を提供できるのかを探求します。その他、オイリュトミーや芸術療法を体験できる時間もあります。

100 年に一度の記念祭。この 100 年の豊かな歩みをお祝いし、すべての人が「かけがえのない私」を生きる未来へ向けて、生命をてらす力をもたらすアントロポゾフィー医療の次の 100 年へ向けて、集いましょう。

ご参加をお待ちしています。

お申込みはこちらから↓

<https://forms.gle/8Bx2PJ9FigfvG5YU8>



100 周年記念祭
実行委員会

アントロポゾフィー医療 100 周年記念祭

いのち 生命をてらす力

2021 年 10 月 30 日 (土)・31 日 (日)

オンライン開催

ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンによって創始されたアントロポゾフィー医学は 2020 年に 100 周年を迎え、今年は病院設立、オイリュトミー療法、薬学が 100 周年となります。日本でも正式な認定を受けた医師、看護師、薬剤師、芸術療法士が増え、認定を得たクリニックも生まれました。アントロポゾフィー医療では、各専門職は患者さんを中心に治療共同体を形成し、その方が「かけがえのない私」を生きることを援助します。現代医学の一般的な治療のみならず、独自の自然のプロセスを利用した医薬品、看護師による特別な外用療法、魂の喜びをもって取り組む芸術療法などを行います。

10 月 30 日、31 日の二日間、日本でアントロポゾフィー医療を実践している専門職がアントロポゾフィー医療とは何かについて語り、その実際をご紹介します。また現代の社会病理についても、考察や意見交換を行い、みなさまと取り組む機会とします。

100 年に一度の記念祭です。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

対 象 一般の方、教育に関わる方、医療に関わる方など

定 員 ライブ参加 100 名、先着順 ＊ライブ参加者には後日全員に録画配信いたします。
(録画視聴のみの参加も可能です。録画に「振返りと意見交換」は含まれません。)

参加費 6,000 円 (2 日間の通し料金、単日参加・録画視聴も同額)

お申込 下記フォーマット、あるいは右下の QR コードからお申込みください。

お申込み受付後、参加費の振込先をお知らせします。お振込みをもって受付完了となります。
お振込み後、1 週間以内に受付完了の連絡がない場合、問合せ先までご連絡ください。
10 月 25 日 (月) に Zoom のリンクをお送りします。
＊お振込み後のキャンセルはお受けできません。

<https://forms.gle/8Bx2PJ9FigfvG5YU8>



締 切 10 月 20 日 (水) ご送金必着のこと

お問合せ 日本アントロポゾフィー医療の会 100 周年記念祭実行委員会
mimoza_house2018@yahoo.co.jp 石川／八尋

主催 日本アントロポゾフィー医療の会

編集後記：日本アントロポゾフィー看護協会会報第一号をお届けできることがとてもうれしいです。この会に集った素敵な人たちで、生き活きた交流と探求ができればその可能性はきっと無限大——。交流と探求の場として、この会報が少しでもお役に立てたらと願っております。これから原稿のお願いやインタビューなどのお願いをさせていただくかと思います。どうぞよろしくお願いします！ ご感想やリクエスト、ご寄稿など、ぜひ編集部までお寄せください。そして編集部は、ただ今絶賛部員募集中です！ 季節ごとに発行ができるといいなあ！ ご寄稿・ご要望・ご連絡は、saekouno2013@gmail.com まで。みなさまどうぞよい夏をお過ごしください。(うの)